The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 1938～41年のテインペーミン : 闇と光のはざまで |
| Author(s) | 南田, みどり |
| Citation | アジア太平洋論叢. 2000, 10, p. 19-57 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/99944 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 1938～41年のテインペーミン－闇と光のはざまで－

南　田　みどり*

## はじめに

テインペーミン(1914－78)は、その著作の中で1938年から42年という時代の再現を幾度となく試みた。[1]彼はこの時代を、さまざまな謀略が暗躍する日本軍侵略序曲の時代ととらえ、それら謀略を容易にしたビルマ側の要因を重視した。彼はそれが、後の抗日・独立闘争における闘争主体の諸矛盾のみならず、独立ビルマ政治の諸困難と密接にかかわると考えた。ゆえに彼は、幾度となくこの時代をたどりながら原点の確認に努めたのである。[2]

筆者はこの時代に関する彼の作品を、幾つかの角度から断片的に論じてきた。[3]本稿の目的は、それらを補完し、テインペーミン自身の叙述を中心に、この時代の彼の行動を確認しながら、それを背景に彼が執筆した小説の意義を再検討することにある。このうち、彼が抗日活動に入った41年末以降は既に検討を加えたので[4]、ここでは、彼がカルカッタ留学から帰国した38年４月から41年末までを扱うこととする。

## 第一章　短編の背景 －1938年４月～９月－

### 1　帰国の背景

その自伝によれば、カルカッタのテインペー(戦前に関しては以下このように称す)を呼び戻したのは、畏友ヌであった。[1]彼は、テインペーをジャーナリズム留学生として英国に派遣すべく、バモー首相と準備を進めていた。西欧留学は当時青

＊大阪外国語大学大学院　地域文化学科アジアⅡ講座

年の夢であった。テインペーの尊敬するネルー家が、祖父、父、娘三代共に英国留学しながら独立闘争に身を投じていたこともあって、宗主国留学は、その時点では彼の政治的信念と矛盾するものとはとらえられなかったようである。

彼は指導教授バルワの承認を得て、万一の場合復学する手続きも取った上で、カルカッタ大学を退学した。インドからビルマへ多数が出稼ぎに来た時代に、カルカッタで特派員としての実績を積み、広告代理業で生計を立て、ビルマにおいても小説家としての名声を獲得し、24歳にして1,000ルピーを蓄え帰国したテインペーは、例外的成功者であった。

帰国後テインペーは、まずバモーと面談した。西欧留学中マルクスレーニン主義にふれて貧民党を結成したというバモーを、その大仰な服装と演説ぶりもあいまって、テインペーはえせ社会主義者とみなしていた。しかし面会時のバモーの自然で友好的な態度に、テインペーは親近感を持った。

テインペーはバモーに、ナガーニー・ブッククラブ[2]向けに英国から送られた書籍が税関に留め置かれている件で善処を要求した。バモーは、自らを共産主義者と名乗り、留め置きに遺憾の意を表明した。そして書籍搬入許可を約束し、後にそれを実行した。さらにバモーは、テインペーの長編『進歩僧』の文体を高く評価し、彼のように英緬両語に堪能な書き手がビルマ・ジャーナリズムに必要だと主張し、留学は公募形式を取るが本命はテインペーだとほのめかした。

公募は新聞紙上に掲載され、他に3名の応募者があった。しかし選出されたのは、応募者の一人でテインペーの友人ニョウミャであった。テインペーはカルカッタに戻る機も逸した。1300年事件と称される独立闘争が激化していたためである。比較的曖昧ゆえに友好を保ってきたバモー首相と彼らグループとの関係も、この闘争を契機に決裂したのであった。[3]

テインペーミンは、自伝でこのように帰国の背景たる留学問題を詳述する。[4]しかしそこでは、彼のこの時期のより重要な行動には言及されない。それはおよそ以下のような行動とされている。

カルカッタでテインペーは、留学仲間フラペーとともにインド共産党ベンガル州委員会にムザッファル・アフマドを訪れ、ビルマ共産党設立への協力を要請していた。[5]2人は、自分たちが我らビルマ人協会に加盟する「青年知識人政治指導者」と

して社会主義共産主義を信奉するに至り、同協会と労働者農民階級の指導のために共産党を設立したいと述べ、コミンテルンとパイプのあるインド共産党に、コミンテルンと連絡を取ってビルマ共産党設立を援助するよう要望した。そして、アフマドは援助を約束したという。[6]

テインペーは、帰国時に一人のベンガル共産党員[7]を同伴した。自伝は帰国時期も明示しないが、一説にはそれは1938年３月とされる[8]。またこの時期の史実を骨糸に実在架空の人物を織り交ぜ、作者自身をも主人公の先輩活動家テインペーとして登場させた長編『東より日出ずるが如く』でも若干の言及がある。作者は主人公に、38年の「夏季休暇が明け、授業が再開したばかりのある夜」自治会書記長室で、油田労働者の現状を報告するテインペーを目撃させているのである。

「その他に、ぼくが今まで会ったことのない新顔が一人来ていた。彼はコウ・チョーニェイン先生と同年配で、木綿のロンヂーにピンニー上衣を着ていたので、学外タキンかと思われた。. . . 中略. . . これがテッポンヂー・テインペーだったのである。コウ・テインペーは夏季休暇でカルカッタ大学から帰省後ただちに、イエナンヂャウンに赴いていた。当時イエナンヂャウンでは、労働者がストライキ中であった」[9]

この場面はテインペーが、38年夏季休暇明けの６月頃には休暇を名目としてすでに帰国していたこと、そして『東より日出ずるが如く』が連載された1953年から57年においても、彼の帰国の真相の公開をはばかる事情が存在していたことを意味するのではあるまいか。

## ２　『印緬紛争』

『東より日出ずるが如く』はまた主人公に、38年６月から９月にかけて生じたインド・ビルマ民族抗争を目撃させ、彼にテインペーのベストセラー『印緬紛争』を読ませてその認識を深めさせる。[10]ベストセラー誕生までの経過は、その自伝によればおよそ以下のようである。

帰国直後テインペーは、スコット市場（現ボウヂョウ市場）２階の友人宅に身を寄せた。ヌ夫妻も同所に下宿していた。市場西側にあるナガーニー出版社は、アウンサン、タントゥン、バヘイン、フラペーらのたまり場であった。[11]ここを拠点に彼は

学習会を組織し、ナガーニーの出版活動に携わったのである。

ナガーニー第８番目の出版物で８名の評論集『ビルマの問題』を、彼はマウンマウンミンのペンネームで監修した。このうち旅行記形式で社会主義の優位性を説くテインペーの評論「真の進歩へ」が、仏教を侮辱するという理由で攻撃された。[12]バモーを党首とする貧民党系のバンドゥラ・ジャーナル編集長ウー・セインがその口火を切り、ターダナーマーマカ（青年僧侶会）やターダナータンシンイエー（教団浄化）など宗教団体が加わって、テインペー、ヌ、ナガーニー編集長オンキンを名指しで攻撃した。テインペーはこれを、宗教を利用した反動勢力のあがきととらえたが、一同は問題が拡大しないうちに、シュエーダゴン・パゴダ境内で謝罪集会を行った。すでに印緬紛争が生じていたためでもあった。 テインペーは同書で、社会主義共産主義こそ世界再生の手段であり、それが実現する豊かな世界でこそ「仏教などの崇高な思想」が栄えると述べる。[13]こうした微妙な表現や謝罪集会の実施などは、批判の自由も保障されないほど仏教の権威が絶大であったがゆえに、ビルマ社会主義者たちが、仏教界を敵に回すことを回避したことを物語るであろう。

ナガーニー第12番目の出版物『印緬紛争』[14]は、９月10月で10万５千部を印刷した。同書でテインペーは紛争の根源が、植民地化以来英国の導入したインド人資本家によるビルマ人への搾取と、それに対するビルマ人の積年の憤懣の爆発にあると説いた。彼は統計を適宜使用しつつ、ビルマ人1,200万に対しインド移民は100万にのぼり、10年間の出入国記録からインド人がさらに増加の傾向にあると述べる。金儲けを目的にビルマに来たインド人は経済を牛耳り、あらゆる職種に進出し、ビルマ人の職場を奪い、失業者を増加させ、農村では金貸しが不在地主となり農民の土地を奪い、ビルマ人の経済的自立を阻害している。そう述べながらも彼は、底辺のインド人とビルマ人労働者の連帯例として、油田ストライキを挙げる。そして、共闘の芽が現れた矢先にこの紛争が生じたと指摘し、批判の矛先を政府に向ける。インド人資本家の代弁者に成り下がり、必要以上の弾圧でビルマ人の憎悪を煽る内閣に総辞職を迫る。さらに彼は、インド国民会議にも不信感を示す。彼のカルカッタ滞在中会議派の新聞が、インド資本で発展したビルマはインドに感謝すべきだと書き立てたためである。そして彼は、会議派左派もしくは貧者の利益を代表する組織が進出しない限り我々はインド人を理解できないと結ぶ。

彼は、ビルマ人多数がインド憎悪に傾いていた時期に、偏狭な民族主義ではなくむしろプロレタリア国際主義をの立場に立とうと努め、真の敵を英国の分裂政策とみなし、社会主義への期待をほのめかした。[15]インド通テインペーの説得力ある論旨がこのベストセラーを生んだといえよう。彼の見通しどおり民族紛争に端を発した1300年事件は、階級闘争の様相を帯びつつ反英反植民地闘争へと展開して行くのである。

## 第二章　短編小説が描く植民地ビルマ

### 1　「マーリー」

テインペーミンの小説の評者の多くは、その政治性を強調する。たとえば1933年から40年の彼の小説を検討したアウンサンスーチーは、それが「文学が、1930年代に力を得つつあった民族主義運動と歩調を合わせて、啓蒙的な役割を果たしてきたことを示して」おり、テインペーは「叙述部分と会話の両方に傑出した才能をもった天才作家」だと評価するが、「重い政治的メッセージのために、物語が現実から遊離してしまう」「政治的、社会的理想のためには、現実らしさをあえて犠牲にした」と批判する。[1]またゼーヤマウンは、インドでのマルクス主義洗礼の影響が、テインペー帰国後の文学に著しく現れたと述べる。[2]一方、「政治作家」テインペーミンの1933年から67年の短編を丹念に検討したマウン・スンイーは、その短編に非政治的短編が多数を占めると指摘する。[3]

たしかにテインペーミンの短編には、その初期からメッセージ性に濃淡が認められた。マウン・スンイーは、38年発表の最初の作品「マーリー」[4]も非政治的作品ととらえ、「ウー・ヌがこきおろす類いの小説」「全くの恋愛小説」と批判する。[5]はたしてこの「恋愛小説」は、テインペーのこの時期の軌跡とは全く無関係に存在するのであろうか。

タイトルは、庭師を意味するヒンディー語の借用語である。それは、庭師がインド人に多い職業であったことを物語る。舞台は首都とおぼしき町の高級住宅街、時は同時代とおぼしき時代、太陽が焼けつく真昼に始まることから、季節は乾季で暑季と推測される。人物は庭師と、雇い主の若いビルマ女性マ・ミャウィン、隣家の画家でそれより少々年長のビルマ男性コウ・キンマウンである。

導入部で、へまな庭師を女主人がしたたかになじる。庭師の名は明示されない。庭師よりやや年上で、「お月様のような」美貌と、短めのロンヂーからのぞく「黄金の柱のような」足の持ち主であるこの娘は、雷鳴のようなどなり声で、「カラー(インド人)」「犬のインド人」「犬一族死神に引かれろ」「馬鹿インド人」[6]などと彼を罵倒する。それは庭師を悲しませ、恐怖に陥れ、抗弁する気持ちを萎縮させる。彼女はさらに、彼の耳を引いて隣家との垣根に連れて行き、隣家を手本に庭を作れと命じる。手が離されても彼の耳は「まるで犬の耳のようでいつまでも立たなかった」[7]ほどである。ここで提示されるのは、抑圧者としての有産階級ビルマ人と被抑圧者としてのインド人下層労働者との矛盾である。そして名のないインド人は、感情を持つ生身の人間として描かれる。

庭師の抑圧された憎悪は、隣家の美しく整えられた花に向かう。彼は「大きなため息をつくと」[8]鎌を握り締める。彼にとってもはや、灼熱の太陽は月光となり、垣根の刺もハエが止まった位にしか感じない。女主人の前ではネズミ、庭ではウサギだった彼は、隣家の庭に入ると虎と化す。その目は充血し、吹き荒れる怒りの嵐は、鎌をあたかも稲刈りか薪割りのように振り回し、瞬時に花園を荒れ地と化す。

その物音に、牛の侵入かと目覚めた昼寝中の画家は、花の無残な姿を目にして哀れみ、怒って庭師を追う。庭師は夢から覚めたように我に返り、遁走する。水浴中だった娘が水浴着のまま駆けつけ、平身低頭する。常々疎遠であった画家と娘は、共に庭師を呪ううちに急接近する。以来画家は、園芸伝授のため隣家を訪れる。庭師の不始末は愛の懸け橋となり、庭師が復帰して、両家の垣根を取り払う風景で作品は結ばれる。

テインペーの筆はインド人庭師の感情に寄り添い、むしろビルマ人有産階級の姿を戯画化する。環境を命の如く重んじ、美しい庭を自己の身体の一部とみなし、庭を鑑賞してこそ素晴らしい絵が描けると考える画家にとって、愚かなインド人による庭の破壊は、身体の一部の喪失である。自然の美に価値を置くビルマ人はいささか特殊ではあるが、植民地主義者をパトロンとして発展したビルマ近代絵画の世界を重ね合わせれば不思議ではない。さらに作者の筆は、水浴着姿を忘れるほど取り乱した娘の滑稽さを描き、その胸に釘付けとなる画家の好色な視線に言及することも忘れない。

当時首都人口の半数以上を占めたインド人の大多数は、エリートよりむしろ底辺労働者であった。そこに焦点を当て、その抑圧された感情の噴出を描き、抑圧者としてのビルマ人有産階級を揶揄するところに、作者の民族を越えた階級的視点が表出する。これは、ベストセラー『印緬紛争』の先駆け的短編であった。しかし反インド人感情の強い当時のビルマで、このような構図をあからさまに示すことははばかられる。テインペーは「恋愛小説」の形式にユーモラスな語り口を加え、人物すべてを揶揄するかにみせてビルマ人読者の反発をかわしつつ、インド人底辺労働者の眼を導入したといえよう。その後もテインペーは、インド人に対する比較的公正な立場を保つ数少ないビルマ人であり続けた。[9]

## 2 「石油」

持てる者と持たざる者の矛盾の構図は、「石油」では英国資本とビルマ人労働者の対立として示される。37年バルワ教授秘書として一時帰国したテインペーは、我らビルマ人協会本部派遣油田労働者状況調査委員会代表団員として油田地帯イエナンヂャウンを訪れた。カルカッタに戻った後、彼はそれをもとに「石油」を執筆した。[10] 翌38年４月のミャンマーアリン紙ビルマ暦新年特別号に掲載されたこの作品は、「労働者階級の生活に触れた最上の作品」と評価される[11]ように、英国植民地支配を直截的に告発した反植民地小説として戦前のビルマ文学史に名を残した。

舞台は油田労働者長屋の一室、時は同時代である。季節は明示されない。一室に住む労働者コウ・ルードウ、妻マ・スィン、12歳の娘ミャニュン、９歳の息子チョーインを中心に、いくつかの矛盾をモチーフに物語は展開する。英国企業経営の学校で習った英国国歌を歌う息子は、ビルマ史や仏教徒の祈りに無知である。植民地教育の弊害を危惧する父は、家庭で息子に民族教育を施そうとする。しかし一帯は夜の闇に沈み、ビルマ語書籍を読む灯油にも事欠く暮らしである。豊かな石油は採掘労働者のものではない。テインペーは父親にその様を、「海の生物が水に飢えるみたいなもの」[12]と嘆かせ、利潤を生む労働力の持ち主がその恩恵に預からぬ有様を第一の矛盾として提示する。

そしてテインペーはその解決として、父親に油を盗むことを決意させる。盗みは仏教徒にとって破戒である。しかし逡巡の末それは合理化される。父親は、この土

地が有史以来民族の所有物であり、「わしらの土地から出た石油をわしらのものにする。どうして罰あたりなものか」[13]と考える。「世界の存続する限り／ビルマの地もこれ不滅なり／これぞ我が国我が土地／これぞ我らが国我らが土地」[14]という我らビルマ人協会歌の主題が具現化される。喪失物の奪還は盗みではない。それは仏教徒の祈りを学び、民族のアイデンティティーを確立するための手段と位置付けられる。

かくして暗闇の一家に訪れた明かりであったが、それは父親の期待に反して、必ずしも福はもたらさなかった。テインペーは明かりに照らし出された部屋の中に、貧しい一家の生活の細部を示す。さらに、勉強疲れの息子や、明かりで睡眠不足の娘や、息子の学習の声に迷惑する隣人たちの姿を示し、明かりが引き起こす疲労や物憂さをも描く。さらに彼は、主人公の妻が聞き及んだうわさとして、倉庫係が石油盗難の罰を受けたことを知らせ、「正義」が皮肉な結果を生むという第二の矛盾を提示する。

友人の災いに衝撃を受けた父親は、嘆きと怒りのなかに解決策を模索し、娘の指輪を償いに用いることを決意する。翌朝指輪の紛失を知った姉が弟を疑い、ケンカが始まったところへ戻った父親は、トラブルを根元から断つべく、その原因となった石油を流して土に返す。問題解決のための行為が新たな問題を生み、原因と結果は繰り返し、矛盾の輪廻は果てしなく続くかに見える。しかしテインペーはここに、現世の困難を前世からの運命として諦めるのでなく、解決に向け行動する新しいビルマ人像を提示した。こうした無数の彼らが、38年１月ストライキを打ち、11月にはラングーン目指し400マイル行進を始め、1300年事件の山場を導いた。作品はこれらの展開を予兆するものとなったのである。

父親が第一の盗みを決意する前に発するため息は、マーリーが花園荒らしの前に発するため息同様、虐げられた弱者の逡巡の末の抵抗の決意を示す。しかし「石油」は、二回の「犯行」場面がカットされる点で、「マーリー」とは異なる。「石油」におけるため息は、決意だけでなく犯行を暗示する重要な意味を持つ。この作品を「余分な要素がなく、構成は隙間なく緻密である」と称賛するミルンは、作品中最も重要な二犯行のカットを、読者がメインテーマすなわち父親の逡巡、希望、幻滅に集中できるようにするためのものだと指摘する。[15]

ただしこの作品が非現実的部分を含んでいることは否めない。石油盗難後暗闇の労働者長屋の一角が明るくなれば、この一家が疑われて当然であるにもかかわらず、疑いがかからない点や、娘の指輪を父親が換金したとして、いかなる名目で友人に手渡したかもさだかでない点などにそれは見受けられる。しかしこれらに具体的に言及した批評はない。作品はマウン・スンイーをしても、「油田地帯の油田労働者の子供が石油がないため石油ランプで十分本が読めない状態を書いたのは非常に胸が痛むものだ」[16]とさえ言わしめる。これほど批判者たちに蓋然性の欠如を見落とさせたのは、反植民地主義的メッセージのインパクトのなせるわざだったとしか言いようあるまい。現実性と非現実性をないまぜにしながら、テインペーの虚構は巧みに時代の真実を表現したのである。

### 3 「嘆きの歌」

階級的視点を小説に導入したのは「石油」「嘆きの歌(原題　歌を歌って泣かねばならない)」からだと、テインペーミン自身は公言している。[17]それでは、ビルマ労働者階級と英国資本の矛盾を描く「石油」に対し、「嘆きの歌」はどのような階級的視点を示すのであろうか。「実にビルマ文学界で『文学とは人民のためのものだ』と初めて宣言した人物はテインペーミンにほかならない」[18]と述べるミンユウェーは、その例として「嘆きの歌」冒頭近くの一文をあげる。

「この貪欲きわまりなき資本主義帝国主義時代に、この恥知らずな、慈悲なき弱肉強食時代に、文学のための文学ばかりを書いてはいられない。のどかで甘いキジバトの鳴き声のみを愛でてはいられない」[19]。

このように「嘆きの歌」は、作者の分身と思しき作家が語る一人称小説である。それは印緬紛争の余震さめやらぬ38年９月、ダゴン誌に掲載された。ある雨季(５月－９月)の午後６時半、首都市街地の女王公園(現独立記念公園)付近を歩く「わたし」は、編集長から純文学的作品を書くよう命じられ、題材を求めて町をさまよっている。

巧みな歌声を小耳に挟んだ彼は、歌を楽しむ子供を描くべく駆けつける。しかし公園の外の歩道で彼の目を射たのは、紙やぼろ布を伝統演劇の衣装に見立て、真っ白に顔を塗り、劇中歌を歌い踊る12歳くらいの少年とその妹らしき10歳くらいの少

女であった。その目は赤く、表情は暗い。兄は汗だくで、こめかみと首の筋が浮き立ち、疲労と悲しみもあらわに、「生命のない船のマストから汽笛が鳴るがごとく、気乗りのしない口から」歌を吐き出し、妹は金の入った鉢をジャラジャラならして「お恵みください。お哀れみください。兄さんがた、姉さんがた、バーブーの旦那がた」と恵みを乞う。[20)]

ここには「マーリー」のような底辺のインド人への共感はない。物乞いのビルマ兄妹を包囲するのが、施し手たる優位な立場のインド人だからである。彼らはインド語英語ビルマ語を交えて口々に叫ぶ。「金はやる。ラブシーンをやれ」[21)]と。兄妹に恋人を演じさせるが如き「闘鶏より残酷な闘い」[22)]を見るにしのびない「わたし」は逃走しようとするが、興奮した見物人に出口をふさがれる。けなげに演じる子供達を前に、うなだれ、目を閉じ、彼は理不尽な社会を恨む。そして考える。貧しい子供たちは仕事がなく物乞いになった。昨今は乞食も増加し、並の方法では稼げない。異様な芸で人目を引いて食べるしかない。本来飢えた子供は泣くものであるのに、泣いていても食べることのできない子供達が、歌を歌って泣くのである、、、と。

子供達の心情とは裏腹に、王朝時代を彷彿とさせる優雅ですずやかな歌の中に、彼は伝統劇で歌われるいかなる悲歌[23)]よりも、痛切な嘆きの歌を見いだす。耐えきれず踵を返す彼に追い打ちをかけるのは、インド系映画会社社員とおぼしきビルマ人の、以下のような会話である。

あの二人は使える。会社はストライキ中だからレコーディング歌手が必要だ。乞食だから多額のギャラは不要。連れていったらインド人のボスも感謝するだろう。でも値段は高めに言っておいた方がいい、、。

奴隷根性に毒された同朋からも逃げるように、彼はあてもなくバスに飛び乗り、いつになれば純文学が書けるのかと嘆く。

この作品は、文学者は傍観者となってはならず、民族の独立に貢献する文学を書くべきだという37年のテインペーの宣言[24)]を受け、抑圧される階級解放のためプロパガンダ的作品を書くべき自己を再確認したものであった。しかしそれを前面に立てつつも、作品から浮かび上がる対立の構図は支配者インド人と支配されるビルマ人であり、その背後の英国帝国主義は、周辺風景の最高裁判所の建物や女王公園などに象徴されるにとどまる。折しも作品舞台の38年雨季の首都は、インド人とビ

ルマ人との衝突が繰り返されていた。

ミルンは、この作品が「短編小説というよりむしろいささか感情的なトーンのスケッチ」だと指摘しつつも、「テインペーミンの文学とプロパガンダの関係の概念を扱っている」と重視する。[25]小説的でない印象を与えるのはこの作品が、「マーリー」や「石油」のように、作者が登場人物の一部の視点から語ることも、全知で語ることもしないためである。これはテインペーミン初の一人称小説であり、戦後の彼の多数の一人称小説や、随想風私小説あるいは傍観者小説[26]の先駆けをなす作品としての意義をも持ったといえよう。

## 第三章　長編の背景ー 1938 年 10 月～ 1941 年 10 月

### 1　協会除名の背景

テインペーはその後も文筆業のかたわら[1]、助言者として学生闘争にかかわった。地の利はよいが手狭だったスコット市場からバー通りに転居し、その一人住まいには、学生指導者ら多数が出入りした。[2]38年12月学生自治会は、すでに11月30日要求貫徹行進を開始していた油田ストライキ労働者部隊の支援活動に入る。支援学生が逮捕され、それに対する一連の抗議行動で死傷者が出ると、学生たちは12月21日ストに突入する。テインペーも逮捕者にさし入れ、学生集会に同席し、財政支援の橋渡しなどで動き回った。[3]

39年１月14日、彼はラングーン緊急治安法により逮捕される。11日に逮捕されたヌに面会に出掛ける途上だった。彼はラングーン刑務所に拘留され、２週間余で保釈された。[4] 一方２月26日学生ストは解除され、学生闘争は収束に向かった。

『東より日出ずるが如く』は、スト解除に至る経過を主人公の体験としておよそ次のように詳述する。[5] 学生の要求は、逮捕者の釈放、闘争終結後学生処分せず試験実施、学生死傷事件の公正な調査、バモー政府閣僚辞任、英国製品ボイコットなどであった。[6] ２月７日有志がハンストを決行すると、ラングーン市内有識者長老たちが仲介に動き出す。学生に代わり政府と要求獲得交渉することを約束した長老の顔を立て、11日ハンストは中止された。[7] ２月12日総督招集の立法評議会はバモー政府不信任決議を採択し、ウー・プ新内閣が組閣される。長老たちは新内閣との交

渉で、要求のうち前記３点を獲得する。２月26日ビルマ学生自治会連合執行部は、テインペーを含む学外者出席のもと論議の末、スト解除を決定した。[8]

しかし、いったん解除に賛成した自治会連合執行委員の一部が反対に転じる。その大半がビルマ語学校生徒や高校生で、ジャーナリズムの一部がそれを支持した。彼らは３月初旬、紙上でテインペー、ヌ、アウンサンの３名を、学生にあらずして学生問題に介入しスト解除を指示した裏切り者であると攻撃した。[9] そして我らビルマ人協会ラングーン支部は、その責任者としてテインペーを除名に処した。[10] その後学生指導者が粘り強い説得で団結を回復し、３月８日の学生議会で投票によって執行部のスト解除提案は承認される。

『東より日出ずるが如く』はさらにテインペー処分の背景を、主人公の伝聞の形で述べる。処分の背景としては第一に、我らビルマ人協会古参活動家たちの知識人新参活動家への根深い不信があり、とりわけその矛先がテインペーに集中していたことがあげられる。同書はそれに先立つ１月、英語の堪能な知識人の中執進出を快く思わず、テインペーの鼻持ちならない生意気さにも業を煮やす古参協会員たちの会話を、主人公の小耳に挟ませる。[11] ２月のハンスト解除後も、一部指導者を無規律だと批判してラングーン支部の恨みを買った「あまのじゃくな性格」のテインペーの除名を主張する人々の存在や、ラングーン支部執行部と中央執行部の意識の乖離などの情報が、主人公に友人から与えられる。[12]

処分の背景の第二には、闘争を巡る戦術的対立があげられる。それについてテインペーミンは、自伝でもおよそ次のように述べている。1300年闘争は学生のみにとどまらずあらゆる階層による非暴力反植民地闘争であった。あらゆる戦術が駆使され、残されたのは武装闘争のみだったが、その機は熟さず、「組織活動と思想的調整］にいましばしの猶予を必要とした[13]。武装闘争の準備の必要性を認めつつも、協会ラングーン支部は、無限に非暴力大衆闘争を続行すべしと主張し、テインペーと学生指導者多数は、獲得しただけの勝利を確保して大衆闘争を秩序的に収拾し、組織を強化して次の闘争に備えるよう主張したという。[14]

『東より日出ずるが如く』はさらに、戦術をめぐる知識人内部の矛盾も主人公に見聞させる。協会指導部多数とヌは英国製品ボイコットや行政打倒など政治的課題を学生闘争の前面に立てるよう主張し、学生指導者多数とテインペーはそれに反対

し、アウンサンは中立派だったことが、友人からの情報として主人公に与えられる。さらにこの問題でヌとテインペーが激論する秘密会議に主人公を同席させ、前者がインド国民会議とガンディー主義を、後者がインド共産党の路線を手本としていたことを悟らせる。[15]

除名の背景の第三には、テインペーミン自身も認める彼の個人主義的行動が存在する。たとえスト解除が民主的手続きに則った決定であったにせよ、それに至るテインペーの行動は疑念を生むに十分なものであったようである。ヌ、タントゥン、アウンサン、チョーニェインらは、「私がウー・トゥイン、ウー・プ、ウー・ソーなど長老政治家と交際が多い、親しすぎると考えて、私の国内政治活動に疑問を持ち」、テインペーが個人攻撃に加担しないこととともあいまって疑念を増大させ、除名に至った[16]と後年彼は回想するが、思想信条を問わぬ彼の広範な人脈が疑惑を生んだといえよう。しかもそれは疑惑にとどまらなかったようである。彼が、「新たに登場したウー・プ連立政権と学生闘争の秩序的収拾に向けた交渉にあたって諸方面で援助激励した」[17]というその回想における一節は、彼がそれら独自の人脈を使って解除に向けて働きかけを行ったことを暗示する。

ただ我らビルマ人協会史では、テインペー除名に関する記録がない。学生スト解除で闘争が分断され、官憲が激しい弾圧を繰り返し労働者農民も打撃を受けたことに言及されるのみである[18]。事実関係の究明は今後の課題として残されている。

## 2　除名の余波

「除名」直後テインペーは、日本帝国主義と戦う中国を支援する完成間近かの中緬公路とその近隣のシャン州に関心を寄せた。当時英国帝国主義の分断政策によって、シャン封建藩主ソーブワーはビルマ人政治活動家のシャン入りを拒んでいた。テインペーは敢えてシャンへ単独旅行し、各地を観察して軒高さを回復する。[19]

前述のように除名事件は、不透明な部分を残しながらも自伝で饒舌に語られた。しかし、39年８月のビルマ共産党創設にかかわるテインペーの行動は、自伝でもほとんど言及されない。[20]共産党設立について諸説は微妙に異なるが、[21] テインペーミン自身の非公式の発言によればおよそ以下のようになる。

テインペーの要請を受けたインド共産党は、最初ビルマが当時シンガポールにコ

ミンテルンの出先を擁していた中国共産党の管轄下に属すべきと考え、コミンテルンからビルマ・オルグの許可を得て、ベンガル人オルガナイザーＰｕｒｎａｎｄｕ　Ｄｕｔｔを派遣した。Ｄｕｔｔは1300年闘争が最高潮のラングーンに入り、ビルマ人同志と討議し、細胞的なものを創設し、政治的思想的学習会を開き、オルグ関係の講義も行った。この細胞メンバーはアウンサン、ソウ、バヘイン、フラペー、ゴシャールであり、すべての準備に携わったテインペーは、その個人主義と一部同志のセクト主義により最初の細胞からは除外された。タントゥンは当時まだ十分共産主義者でなく、アウンサンが書記長に任じられた。これは1939年中葉で、後のビルマ共産党はこれをもって党の創始とみなすが、これは完全な政党というより、当時存在したいくつかのマルクス主義学習会のひとつとみなすべきである。とはいえメンバーは重要な民族指導者から成り、それは民族解放と大衆闘争におけるマルクス・レーニン主義の影響を強化したという。[22)]

この他にもテインペーミンは、『東より日出ずるが如く』を通してビルマ共産党設立に若干の言及を試みている。すなわち彼は主人公を、39年２月２日の大学作家協会、青年ジャーナリスト協会主催のＨ．Ｇ．ウェルズ歓迎パーティーに作家テインペーと同行させる。そこで、作家は政党に属すべしと主張するテインペーに対し、主人公をして突如ビルマ共産党の有無を質問させる。そして主人公の真意をはかりかねて一瞬絶句したテインペー自身の口からこう語らせる。

「まだ存在すると言える状態ではないがね、同志。他言は無用だぞ。作る努力はしている。俺とタキン・フラペーがカルカッタのインド共産党指導者ムッザファル・アフマドに頼んで共産党オルグを一人招聘した。その同志はすでにラングーンに来ている。彼が今密かに討議し講義している最中だ。同志にはこの程度しか教えられない」[23)]

秘密活動に従事する者が、さほど親密ではない一介の中級学生指導者にこのようなことを漏らす事自体不自然さは免れないが、このような表現によってテインペーミンは、２月２日の時点でオルグが到着していたことを読者に伝えているのである。

さらにテインペーミンは主人公をある雨季の夜、フラペーの弟フラシュエーにバー通りのテインペー宅まで同行させ、同居中のフラペーやソウやアウンサンらの論議の一端を聞かせる。そこでは、1300年事件の挫折が労働者学生農民の指導に習

熟した前衛党の不在に起因するという総括が語られる。[24] このことも共産党設立の論議のための学習会の存在を伝えているといえよう。

この時期の共産党はしかし政党としては機能せず、我らビルマ人協会、労働者協会、農民協会などを隠れみのに幹部養成のための共産主義秘密講座を組織するにとどまった。それは指導者たちが我らビルマ人協会の専従活動家を兼ねたためであった。[25]テインペーミンは『東より日出ずるが如く』主人公を、我らビルマ人協会本部で開催された労働者討論会という名目のこのような講座にも出席させている。[26]

協会除名の余波で、創設メンバーから外された共産党設立の周辺を、彼はこのように『東より日出ずるが如く』で控えめに挿入するにとどめたのであった。

## 3　映画監督時代

この期間もテインペーは執筆を続け、「農村改革」[27]『現在当面の我らの任務』[28]『ヒットラー、チェンバレンいずれが悪いか』[29]などの重要な評論を執筆した。40年初頭にはビルマ初の作家協会設立にもかかわり、委員をつとめた。彼は基本綱領執筆に携わったが、「一匹狼的気質」と他の活動多忙化のため活動に熱心でなかった。作家とジャーナリストを擁した同協会は文学界でイニシアチブを発揮できず、作家の権利や小説の技法など論議すべき問題も棚上げにされ、自然消滅に至ったという。[30]

政治活動を退いたテインペーは、その空白を映画製作という新しい挑戦で埋めようと努めた。1300年事件後彼はアロンエーヤーワディー通りの住居[31]をへて、当時知己を得た作家兼映画監督ニャーナ宅に近いサンヂャウンのパドゥマ通りの小さな家に移っていた。ニャーナ宅は、当時作家や映画人の集まるサロンを呈していた。[32]

ニャーナを介して彼は、最盛期にあったブリティッシュ・バーマ映画社の辣腕社長ウー・ニュンと出会った。当時社屋に隣接し倒産していたハンターワディー仏典印刷所の買収問題をかかえていたニュンに、テインペーは適切な助言を与えた。ニュンはこれに感謝し、テインペーの文体の簡潔さや、彼がインド留学で自活していた勇気を評価して、監督になることを勧める。テインペーは修行期間なしで、実践しながら監督業が勉強できる千載一遇の機会を利用することになった。[33]

当時の映画監督は外国小説に依拠して脚本を執筆した。[34] テインペーもそれに倣い、英国小説にヒントを得て『男の栄光』を製作する[35]。一方この映画の撮影中、初めて上京し観光して帰郷したテインペーの母が急死するという事件が起こった。ニュンから必要なだけ休むようにとの許可を得て、彼はしばらく故郷に滞在する。[36]

映画は40年末に完成したが、テインペー自ら失敗作と認めねばならなかった。主要な原因はミスキャストによる。[37]彼はまもなく同社を退職する。それは第一に、多数のチームワークを要する映画作りで、彼とスタッフとの相互理解が成立せず、第二にニュンの親族が事業に口出してテインペーと折り合いが悪かったからであった。その後も彼は友人と映画会社を作ろうとしたが成功せず、映画から撤退した。[38]

既にプローム通りの一軒家に転居し、ニャーナ宅から食事を運んでもらっていた彼は、『男の栄光』を撮影中に、チャウミャウン市場に近いボーレイン通りの撮影所に隣接する一軒家に転居し、弟子一人と一見自由な暮らしをしていた。政治とは表向き遠ざかっていたが、この家を拠点に獄中へのさし入れや、仲間の隠匿など協力は続けていた。ブリッティッシュ社退職後は家を借りず、市街地ＹＭＣＡに隣接するインターナショナル・ホステルに居を定め、執筆活動と陰の政治協力を続けた。[39]

テインペーの我らビルマ人協会除名は、タントゥンによって撤回されていた。彼はテインペーを呼び出し、反帝国主義闘争において今後外国勢力との連帯が必要だと説き、テインペーに訪印して国民会議や共産党と連絡をつける任務を与えた。[40] 出国方法は後日考えることになったが、このインド行きは実現されなかった。41年初頭テインペーが性病で入院したためである。[41]

## 4　文学への回帰

入院体験をもとに彼は『現代の悪霊』を書き、41年９月に出版した。[42]それに先立つ41年８月21日から、彼はミャンマー・アリン紙にダガウンチュエッ（一匹狼）の名で戯曲『ウー・ソー英国へ行く』を連載し、10月に戦後ビルマの自治領化を要請するため訪英する予定だった首相ウー・ソーを風刺した。我らビルマ人協会が完全独立を要求している折しも、自治領を要求し、しかも真剣に獲得を目指さず、努力するポーズを示して、自己の政党の人気取りをもくろむウー・ソーの野望を、彼は描こうとしたのである。[43]

本文中ごく近い者のみが知るウー・ソー一家の特徴が描写されるのは、テインペー自身がウー・ソーと個人的に親しく、とりわけ監督時代は自由な往来があったためである。そのため戯曲の作者は覆面作家とされ、原稿の扱いも慎重を期された。「一匹狼」なる筆名は当時のテインペーの立場を最も雄弁に語ると考えられた。それは、我らビルマ人協会を除名され、「地下ビルマ共産党創設のためインド共産党の援助で下準備の段階で指導したが、最初に結成した細胞に入れずにいた時期に」、国民大衆には敵対できず、「国内外の裏切り者」との闘争や、社会進歩のための闘争に背は向けられないという立場である。その立場を証明するものがこの作品であった。「一匹狼」はその作者にふさわしい筆名だと考えられたのである。[44]

文は痛快、筆者は新人、内容は時宜に適って、作品は人気を博し、ミャンマー・アリンは発行部数を増やした。知人たちが、筆者の正体を知らず、テインペーの面前で覆面作家の文章をほめることは、彼にとって一度も感じたことのない愉悦であったという。[45]

作品の主要人物10名は、1名を残して実在の人物であったが、テインペーはあえて、すべて架空の人物であり、もし類似した名前の持ち主が実在したら許してほしいと断り書きをした。[46]冒頭でウー・ソーは、華やかな見送りを受け渡米する。米国ではインタビューした女性記者がビルマ独立より彼の民族衣装に関心を示す。会見したルーズベルトは中緬公路しか話題にせず、子役スターとの約束を優先して映画を見に出掛けてしまう。英国では、チャーチルがウー・ソーの家族の話題を持ち出して時間切れとなる。印緬担当大臣エマリーと会見時空襲に見舞われたウー・ソーは、独立を要求するどころか戦争協力を約束させられる。かくして老獪な英米政治家に翻弄されながら、彼が帰国し仰々しく出迎えられるまでが滑稽に描かれる。

実際にはウー・ソーは10月訪英で成果が得られず、米国では冷淡な待遇を受け、12月日本の真珠湾攻撃で足止めを食い、リスボンに引き返して日本大使館に対日協力を申し出、これを察知した英国にパレスチナで拘束され、首相解任後ウガンダで戦後まで監禁されるなど、虚構を上回る運命をたどるのである。

歴史的結末はさておき、テインペーミンは後年この作品を「人民時代と人民戦争を反映した人民文学の範疇に入る」と述べ、満足の意を表した。[47]

## 第四章　長編小説『現代の悪霊』

### 1　動機と評価をめぐって

現代の悪霊とは、ビルマ語で若者病、青年病と称される性病を意味するテインペーの新造語である。それは、「芸術的ではないが」病気の新語として普及させるべく命名された。退院後「熱い気持ち」で作品を書いた彼は、悪霊のごとく恐るべき性病というイメージを青年読者の心に刻もうとしたのである。[1)]

それは映画監督時代のさまざまな人々との交わりの賜物であった。この時期の人間交流は、文学政治ジャーナリズムの世界で活動してきた彼に、さらに豊かな人生を与えた。貯金とまではいかないが食べるに事欠かず、自己の活動に有益な限りにおいて恋愛を楽しみ、結婚はするともしないとも決意せず、彼は気ままな独身生活を送っていた。[2)]このスタイルは、彼が1300年闘争から撤退してノーマンスクール通りで一人住まいした頃に開始した。協会除名事件の癒しがこのような形で求められたと言えよう。

「一人きりで自由に暮らすということは、自分の部屋に時ならぬときに呼びたい人間を呼べるではないか。友人仲間のこともあろう。よくない女のこともあろう。よい女のこともあろう」[3)]と、彼は回想で述べる。

「豊かな人間交流」のひとつの帰結が性病感染であった。病気は長期化しており、ラングーン病院の性病の権威トゥンラーメッ博士が、病気根治と彼に性病の実態を認識させることを目的に、彼を円形病棟と呼ばれる性病専門病棟に入院させた。彼は様々な症状を観察し、患者や看護婦と交流した結果、二点の動機からこの小説を執筆した。第一は、性病の危険性を多くの人々に周知し、病気の原因となった買春や病気への無知と闘うことである。第二は、当時蔑視されていた看護婦という職業の高潔さを人々に認識させることであった。[4)] さらに彼は当時の大学病院の記録から青年の病気の最多数が性病だと知って[5)]、若い読者を対象に定め、恋愛小説の形式を用いた。ただし、愛の成就のみを目的とする「人生と掛け離れた」「世界は愛のみ」といった類いの恋愛小説を彼は否定した。[6)] 上述の狙いを効果的に具現するために形式を定めたのである。

長期通院の後の入院の決意と執筆に至る背景として、次の出来事も無関係ではあ

るまい。40年に急逝した彼の母は、上京時彼に結婚を勧め、彼の軽薄な恋愛観を戒めた。母は彼が長年交際していた年下の文学好きで政治意識が高い女性を、面識はないが雑誌でそのエッセーや詩を読み、好感を持っていた。「彼女との愛が始まってからも私は何度も裏切ったが、彼女は裏切らなかった」という点も母はいたく評価した。テインペーは母の勧めで、相手の親に求婚の手紙を送ったが、「未熟で愚かな」手紙が娘の父に誤解を与え、拒絶され、「愛していながら私の愚かさで別れた」という。母は、しかし死ぬまでこの娘を愛していた。[7] 自己の体験を踏まえ、性の問題に大胆に踏み込んだ『現代の悪霊』は、作者によるひそかな「放蕩」決別宣言であり、その背景には愛の破綻と母の死も存在したと考えられよう。

出版にあたり、主治医トゥンラーメッと政府高官ウー・キンマウンが序を寄せた。前者は医学的立場から、医学関係の描写が正確で病気の兆候症状すべてが理解できる点、健康な子孫の生産が民族の繁栄をもたらすという民族的課題が作品から伝わる点を評価する。[8] 一方後者は文学愛好者の立場から、作品が当時のビルマ社会を明快に映し、人物描写がリアルで、文体や述語が他者に模倣できないテインペー独特のものであり、この時代のビルマ青少年が直面している大きな危険が明示される点を評価する。[9]

出版1カ月後の41年10月の書評は、この作品の反響が大きく、新聞紙上をもにぎわしていることを伝えた上で、およそ次のように述べる。作品はテインペーの他の長編同様、同時代に生じた悪しき行為の消滅を願って書かれた点で、時代改革小説と称すべきだが、時代改革を前面に出さないことで主題がより効果的に浮き彫りにされる。筋は平凡だが、文体が読者を引き付ける。病院内の出来事は読者すべてを性病への恐怖に戦慄させ、ここに作者の腕のよさが見て取れる。普通に書けば読む気もしない性病の害悪が小説形式ゆえに読みやすい。書評はこのように評価し、ビルマに性病が蔓延する現代、青年学生諸君が読むこと間違いないと結ぶ。[10]

『現代の悪霊』は、ビルマ近代現代小説史上必ず言及される「名作」となった。[11] 例えばマウン・ティンはこの作品を、小説的要素を満たし、きびきびした文で、作者の主張を読者に簡明に伝える、登場人物の会話を通して教訓的事柄を語らせ、人物の用い方も芸術的で偏りがない点などで、文学界で最も成功した社会小説だと評価する。そしてこの書の出現を契機に、若者が性病、売買春撲滅、健康問題を考えるよ

うになったと述べる。[12)]

批判者はダゴン・ターヤーのみである。彼は1952年、この作品が恋愛小説でありながら文体が新しく、一定の思想が描かれ、問題を提起するなどの点で特異であるがゆえに人気を博し、出版後ほどなく第二版を発行したと評価しつつも、およそ次のように批判する。性病の害悪を描写するのはよい。しかし読者が病気の恐ろしさを知り、それを憎悪しても、問題の根源には到達せず、表面的改革しか論議されない。売買春から発生する病気の根源には、退廃的資本主義制度が存在する。性病は背徳的中産階級の問題で、労働者農民階級の問題ではない。労働する階級は享楽を求めない。財力のみ優先するブルジョワ的結婚に無縁である彼らは、売春婦との接触もない。農村の正直な人々も同様である。買春は都市在住有産階層あるいは資本家階級の問題である。そう述べて彼は作品を中産階級の問題に関する改革小説だと規定する。[13)]

たしかに『現代の悪霊』はテインペーミンのいう「人民文学」の範疇には入らない。ターヤーの批判に先立つ1948年、テインペーミン自身がこれを、知識人の改良運動を描いたもので、労働者農民の生活には全く言及しないと述べているからである。[14)]では、三年間の政治的体験を越えてなお、彼はなぜ改良運動を描いたのか。それは従来の彼の信念といかにかかわったのか。

## 2　挫折した改良闘争

作品はは三部分からなる。すなわち第一に主人公の失恋と買春から発病に至るまで、第二に病院における様々な症状の患者、看護婦像の提示、新たな愛の獲得、第三に退院後の結婚、性病撲滅運動の展開と挫折、病気再発による死である。挿入される回想を含めておよそ２年間の出来事とされる。[15)]

舞台は冒頭の回想部分に主人公のかつての任地ピンマナーが登場する他は、大半が首都である。時代は同時代である以外明白でない。政治的社会的事象が背景として一切挿入されないからである。これは、視点のほぼすべてが主人公ニュンマウンのものであり、彼の心理を中心に物語が展開し、彼の関心事が極めて狭い自己の周辺に限定されるためである。

作者はニュンマウンを、他人を信じ安く思い込みの激しい空想好きな青年として

創造する。彼を困難に陥れるものは「女の奸計」である。第一に林野庁官吏としてピンマナーで勤務していた彼は、裕福な木材商の娘キントゥエーに「翻弄」される。活発、率直な現代的美人であるこの娘の愛を信じ、ニュンマウンは求婚するが、娘の父親の反対を理由に拒絶される。第二に彼は、失恋の打撃を癒すべく友人の誘いで買春の世界に足を踏み入れ、売春婦たちに「翻弄されて」病気に感染する。

打撃を与える女と病気を与える女という2種類の「加害的」女性を登場させた後、作者は主人公に、英国人との混血の美人で献身的母性的な看護婦アピューを聖なる女性として与える。[16] 作者は、女性不信に陥った主人公に葛藤の中で愛を成就させ、妻となったアピューの助けで彼を性病撲滅運動家として成長させる。ただし作者は主人公を、入院中「不潔な」インド人看護助手に洗顔されるのを忌避する民族排外主義者として、また結婚後の妻の家庭外労働、とりわけ他人の身体にふれる看護婦としての労働を潔しとしない古風なビルマ男児として、不完全で軟弱な個人にとどめおくのである。

鋼鉄ではなく、蝋燭のように燃え立つ主人公を、作者は運動の高揚のさなかで奈落に突き落とす。その契機は、キントゥエーの手紙である。彼女はそこで、愛情の深さを試すために求婚を拒絶したがその判断は正しかったと告げるのである。それは傷つきやすいニュンマウンの古傷を痛ませ、それを忘れるためにさらに運動に没入した彼は、健康を顧みず、梅毒菌の侵入に絶命する。夫のためにキリスト教から仏教に改宗し、家庭内外の労働に勤しみながら夫の運動も支えたアピューが、夫の心痛を共有せず、その病気の進行にも気を配ってこなかったことは不自然であるが、結末でも彼女は、胎内感染の可能性をはらむ子供を宿しながら、絶命する夫を石像のように見守るのみである。視点を死に行くニュンマウンから、彼らの姿を見守る映画監督トゥンミンに移動させて物語は閉じられる。

トゥンミンは作者の分身かつ代弁者である。主人公の遊び仲間で、結婚なるものに期待せず、仕事に支障を来さない自由な恋愛を楽しむトゥンミンは、主人公と一緒に入院治療して、主人公と性病の諸症状や患者の生態を観察し、性病撲滅の道筋について論議をかわす。まず作者は彼らに、独身男性の買春理由を論議させる。性病の恐ろしさへの無知、人心の荒廃、結婚しても妻を養えないという経済的理由、結婚への不信などがあがる。既婚男性の買春理由については、男性の生来の享楽的性

格や、妻の束縛や怠惰からの逃避までがあげられる。次に作者は、社会主義者トゥンミンと改良主義者ニュンマウンの相違を対比する。すなわち前者に、性病の原因たる売買春は資本主義社会特有の現象であり、売春婦の9割が貧困から身を落としているがゆえに資本主義打倒が重要だと主張させる。そして後者には、社会主義社会実現以前に性病が民族を破滅させないよう、現実的で可能なことから手をつけるべきだと主張させる。[17]

この啓蒙小説において、周知させるべきは性病に関する知識である。発病から治癒に至る過程は、主要人物の周辺を固める主人公の遊び仲間や売春女性や看護婦や患者たちの人生模様をはさんで豊かに叙述される。批評の大半はこの前半部のみを強調する。しかしこの作品は、性病撲滅運動の展開と挫折の物語でもあった。当時このような運動は実際には存在しなかったという。[18] ゆえにこれは、作者が創造した架空の運動の発生と挫折の物語だったといえよう。作者は主人公に、退院後退職医師や事業家を説得して回らせ、15人の委員から成る性病撲滅協会を結成させ、主人公を専従書記につかせる。活動内容は寄付集め、学校や組織で講演、新聞への寄稿などの宣伝啓蒙、さらにトゥンミンの協力による性病撲滅映画の製作などであった。

さらに作者は主人公に、政府に対し性病防止の立法予算措置を要求させ、議員への働きかけも開始させる。作者は主人公に、政府に対する提案書を提出させる。提案書は第一に、性病が民族の芽を破壊する重大な疾病であることを政府は認識すべきだと主張する。第二に政府に具体的な売買春対策を提案する。それは、貧困女性の失業対策、売春斡旋業者の処罰、成人男子への結婚の奨励、学校における性教育性病教育、道徳的啓蒙教育の実施、結婚時の性病検査証明書発行の義務づけなどである。第三に国家管理売春が提案される。すなわち地域限定、ライセンス発行、課税、定期検診、無料治療などである。[19]

しかし運動は協会委員たちの不熱心、会費不払い、提案反対者の続出などで停滞していく。提案の表向きの反対理由は、提案が非現実的空想的で、売春を認め売春女性増加につながるというものであった。そして停滞の真相は、従来通り自由に買春したい有産階級が売春地域の限定に難色を示したためとされる。

政治闘争の挫折の後「放蕩」に癒しを求めた作者の痛みは、失恋の癒しを求める主

人公に同様の道を歩ませた。作者は主人公に、自分と同様の病いを与え、そこからいったん生還させる。それは彼を新たな闘争に投入するためであった。そして最後に作者は主人公を、病魔に屈服させ、闘争にも挫折させるのである。彼を敗北させた現代の悪霊とは、性病のみならず、それを温存する植民地社会体制であった。これは、中産階級改良闘争の挫折物語であったといえよう。テインペーは物語の奥奥深く自身の挫折の心痛をも練り込み、改良闘争に挫折した主人公に死を与え、社会主義者トゥンミンを生きながらえさせる。そこに、問題の根本的解決の道筋を示す作者のメッセージがこめられるのである。

戦後も作家たちは、ことあるごとにこの作品の「効用」を語った。アタウトー・フラアウンは12歳でこれを読み作家を志した。[20] これをビルマ初の優れた医学小説と位置付けるアウンティンは、戦前出版された恋愛小説多数をむさぼり読む中でこの作品に出会い、認識を新たにした。彼は、青少年が忌避すべきものをこの小説が指し示し、健康と発展へ導いたと評価する。[21]

『現代の悪霊』は1972年まで第6版を重ね、1996年12月第7版が出版さた。[22] 1999年10月健康医学雑誌『ズィワカ』は、この作品をもとにした「ウー・テインペーミン 現代の善神を生みし人」なる短編小説を掲載した。[23]それは小説形式をとった作品紹介で、性病撲滅協会書記長ニュンマウンの講演を聞いた地方青年の視点で描かれる。後年青年は首都に出るが、講演を思い出して買春を思いとどまる。ニュンマウンに感謝した彼が、今ニュンマウンが生きていればエイズ撲滅運動を闘っていただろうと述べて作品は結ばれる。

『現代の悪霊』は、ビルマで深刻化するエイズ対策としての現代的意義をも持たせられるに至ったのである。しかしこの短編は、ニュンマウンの運動の一面しか伝えていない。ニュンマウンの政府への働きかけの部分は言及されず、精神的啓蒙すなわち娘たちの堕落防止と青年の正しい健康知識向上のみをニュンマウンが説いたとするのである。[24]主人公の社会改革運動は意図的に見落とされる。60年を経た『現代の悪霊』がこのような今日的意義を持たされたこと自体が、現代ビルマの問題の深刻さを物語るといえよう。

## おわりに

1938年の三短編は、テインペーのインド時代と印緬紛争の体験に裏打ちされ、有産階級対無産階級という階級矛盾に、民族矛盾が巧みに導入されていた。「マーリー」は逆転的な民族と階級の支配関係を、「石油」は英国帝国主義と植民地ビルマ労働者の矛盾を、「嘆きの歌」は英国帝国主義に支配される民族間の矛盾を描き出し、民族独立が階級的かつ民族的悲願であることが強調された。息子の朗読する仏教の祈りや乞食の歌う哀切をおびた宮殿の物語など、民族的情感に訴えるいささか古風な郷愁も効果的に用いられた。

さらに夜の闇の中で展開し朝の光の中で結末を迎える「石油」でテインペーは、闇の中にこそ希望が存在し、光の獲得が新たな問題の出発点となるという、人間の営みに普遍的な現象も示し出した。彼がそこで予知した通り、反植民地闘争の高揚は闘争主体の諸矛盾を露呈し、彼は政治的挫折を被った。3年後彼はその経験を長編の中に結実させ、大戦前に創作的文学の世界に回帰できたが、それはつかの間であった。虚構が事実を先取りする時代は終りを告げ、彼は新たな激動と挫折に向かって歩み始めるのである。

戦後のテインペーミンのこの時代の再現に向けた執念は、彼に饒舌にこの時代を語らせるかに見えたが、自伝の空白部分とその補完たる『東より日出ずるが如く』があきらかにするように、その饒舌にはきわめてむらがあった。あいまいなまま置き去られたいくつかの重要事項が、彼の理想とする社会を実現する闘いと少なからずかかわったところにも、戦後ビルマの諸困難がうかがえる。

なお『現代の悪霊』については、その内容も評価も共に男性の視点に偏りがちであることに注目すべきであろう。そして売買春と社会主義体制や労働者農民階級のかかわりに関する一定の幻想もさることながら、この作品の提起した問題の多くが、現在ビルマの直面する政治的経済的困難が増幅させた因習や社会規範ともあいまって、いまだ解決に程遠いことも注目に値する。[25]都市部でも国境地帯でも増加こそすれ減少することのない売買春をも包括した考察は、今後の課題として稿を改めるべきであろう。

## 注

### はじめに

1）Ｊ－５，Ｊ－10，Ｊ－12，Ｂ－25など参照。
2）Ｊ－13，Ｊ－15参照。
3）上記のほかにＪ－６，Ｊ－８，Ｊ－11など。
4）Ｊ－15参照。

### 第一章

1）36年４月ミャンマー・アリン紙特派員テインペーはインド国民会議大会取材で訪印。カルカッタ大学法学部、文学部修士課程に在籍。37年までベンガル州学生連合渉外担当執行委員。インド共産党影響下の人々と接して民族主義を克服マルクス主義を信奉。36年末ビルマ仏教界腐敗批判長編『進歩僧（テッポンヂー）』執筆。37年出版後反響を呼び48年にテインペーミンを名乗るまでテッポンヂー・テインペーと称さる。その畏友ヌにはタキン、ウー、コウ、マウン等の冠称が使用されるがここでは省略。人名経歴はＪ－５巻末の注参照。自伝はＢ－25。

2）37年11月４日反植民地闘争の武器となる思想普及翻訳出版を目的に設立。テインペーは組織担当執行委員として一時帰国時入会説明書を友人に配布（Ｂ－25ｐ．125－126）。しかしＢ－15ｐ．３のクラブ執行委員構成に彼の名は含まれず。11月出版物第１号彼の『サヤー・ルン伝』（35年４月から約１年ディードウ紙連載のタキン・コウドーフマイン伝）出版。36年学生ストを扱う彼の長編『ストライキ学生』37年12月完成。上巻は出版物第５号で38年に下巻は第15号で39年出版。

3）ビルマ暦1300年（西暦38年４月－39年３月）後述の印緬紛争や反英独立闘争などの一連の事件発生。38年末にはヌもテインペーもバモー政府打倒を主張。バモーはテインペーに秘書を通しスカラシップ進呈できず遺憾と挨拶。ニョウミャ選出は英緬両語に堪能な書き手との作家テイパン・マウン・ワの推薦状による。その根拠となった36年学生ストのニョウミャ署名入りビルマ語宣言文は実はテインペーの代作（Ｂ－25ｐ．225－228）。ニョウミャは39年８月19日渡英（Ｂ－25ｐ．256）。大戦で学校閉鎖となり45年まで米国滞在（Ｂ－13ｐ．33）。

4）Ｂ－25ｐ．218－228参照。

5）Ｅ－５ｐ．14ならびにＥ－６ｐ．５ではＭｕｓｔａｆａ　Ａｈｍｅｄとされるが Ｍｕｚａｆｆａｒ　Ａｈｍｅｄ（1889－1980年代）と思われる。1925年カーンプルでインド共産党創設に参加。29年逮捕。43年インド共産党中央委員。64年分裂後マルクス主義派（左派）ベンガル共産党最長老（Ｓ．Ｐ．Ｓｅｍ"Ｄｉｃｔｉｏｎａｒｙ　ｏｆ　Ｎａｔｉｏｎａｌ　Ｂｉｏｇｒａｐｈｙ"Ｖｏｌｓ４．Ｃａｌｃｕｔｔａ，1973－４）。

6）Ｂ－19Vol.1ｐ.339－340。共産党設立の動きは複数存在。英国共産党と連絡したタキン・チョーセイン、ベンガル州委員会を経てインド共産党中央と連絡したビルマ生まれベンガル人ゴシャール（Ｅ－６ｐ．５）。中国系タキン・ボウもラングーン来訪の中国共産党員と連絡取るが党員は第二次大戦直前帰国し連絡断つ（Ｂ－29ｐ．９）。中国人細胞（南海

共産党ビルマ支部暫定委員会)はラングーン中華街とピンマナー(後述『現代の悪霊』の舞台。木材と砂糖の産地)に存在。双方連絡なくビルマ左翼とも関係せず各々シンガポールやマラヤ共産党と連絡(E－2 p. 5)。38年以降他にドクター・ニーニーのグループ等マルクス主義学習会が複数存在しオウンミン宅でアウンサン、バヘイン、タントゥン、ソウらが学習 (ウー・オウンミン1918生まれジャーナリスト。1999年8月5日インタビュー)。オウンミンはテインペーのアフマド会見時期を37年の一時帰国の後と推測。なお我らビルマ人協会は1930年設立。テインペーは33年入党しラングーンのカマーユッ地区協会支部設立。

7) その名はE－6 p. 5はB. N. Dass。E－5 p. 14ではNirandu Duttとされテインペーと彼が最初のマルクス主義学習会を結成しアウンサン、フラペーらがその一員とされる。B－25自伝p. 116はテインペー一時帰国時参加の油田労働者状況調査委員会一員にベンガルの弁護士B. N. ダットがいたと記すのみ。別人又は偽名使用の可能性もあり詳細は不明。

8) E－6 p. 5

9) J－5上p. 48－49

10) J－5上p. 75－107。抗争はビルマ人ムスリム教師 (マウルビーMaulvi) ウー・シュエーピーの仏教批判書『ムスリム偉人と観行』再版後の38年7月19日トゥリヤ紙上某僧侶が同書反対緊急行動を促す一文掲載。他の紙面もビルマ女性と結婚するインド人ムスリムをビルマ仏教侮辱者と攻撃。7月26日シュエーダゴン・パゴダで同書への抗議集会。警官とビルマ人衝突。28日托鉢中僧侶をインド人が襲撃し衝突開始。以後ラングーン市街地で衝突発生し8月末一旦鎮圧。9月2日インド人がビルマ人の車に投石。3日ビルマ人を槍で刺殺し再燃。9月9日まで死者165名負傷者818名。うち官憲の殺害55名負傷108名。55名中インド人3名(B－20 p. 18－20)。1931年現在ビルマの宗教人口は仏教84. 3%アミニズム5.2%ムスリム4.0%ヒンドゥー3.0%キリスト教2.3%その他3.0%うち仏教徒のヒンズー、イスラム、キリスト教への改宗増加(J－3 p. 285)。

11) B－25 p. 317－318

12) 他にウー・バカイン「貧民たちの涅槃」ウー・チンマウン「独立に至る一つの道」タントゥン「戦争と独立」ウー・バチョウ「我々は民族主義を捨てるべきか」フラペー「隊互を組んで進もう」コウドーフマイン「学生達へ」(B－15 p. 23－24)。

13) B－25 p. 269。詳細は同書p. 261－276。現世の苦を逃れ来世に望みを託す仏教で心の平安が得られるかとの疑問や聖者を「彼ら」と呼んだことなどは行き過ぎた表現ではないが宗教の精神生活における役割は重視すべきだったとテインペーミンは回顧。

14) B－20。24頁の小冊子。見開きにトゥンエー(ナガーニー会員)トゥンシュエー(同教育担当執行委員)トゥンオウン(大学生協執行委員)タキン・ティンマウン(我らビルマ人協会)アウンサン(全ビルマ学生自治会議長)バヘイン(ラングーン大学学生自治会執行委員)テインウィン、マウン・ヌ、バスエー(その他の指導者)という名前肩書と共に9名が出版の責任を負う旨支持声明。ただし初版はテインペーの名のみ。11版以降は政府が出版不許可(B－25 p. 260)。会員無料非会員2ピャー。9月19日から10月7日までで11版

(B－15 p. 30)。

15) しかしB－30 p. 64はテインペーがいかにマルクス主義を学べどもインターナショナリストにはなれずナショナリストとして印緬紛争を煽っていると同書を批判。後年テインペーミンは同書再録にあたり英国帝国主義対インド・ビルマとインド資本家対ビルマ人の二矛盾のうち後者に重点を置き過ぎたと述べる(B－22 p. 191－192)。

第二章

1) E－1 p. 76－77ただし訳はJ－1 p. 146を採用。現実遊離の具体例はあげられない。
2) B－13 p, 269
3) B－16 p. 109－127
4) ミャンマーアリン特別号1938年掲載。特別号は定期刊行と別に発行。掲載号が何の記念号かは不明。短編集ではこれを38年発表作品冒頭に配列。なお1940年6月29日ディードウ紙掲載の短編「間違いです」は未発見。短編集にも未収録。B－27巻末一覧参照。
5) B－16 p. 121
6) B－27 p. 224。ビルマ語のインド人「カラー」は黒色を意味するヒンディー語。
7) B－27 p. 224
8) B－27 p. 225
9) 39年2月路上で眠るインド人人力車夫の描写からボンベイの路上生活者10万に言及(J－5中 p. 20)。41年12月日本軍侵略時徒歩で逃走するインド人避難民をヨーロッパ官吏の自動車上の西洋犬と対比。コレラの発生や葬儀の描写から日本のラングーン爆撃時最大の被害者だったインド人が避難民中でも最も災難を被ると主張 (J－5下 p. 257－258)。自伝は言及しないが父方の祖父がインド人医師であったという(テインペーミン出生地ブダリン郡マウンタウン村1999年8月8日における親族一同へのインタビュー)。
10) B－25 p. 183。イエナンヂャウンでは1920年労働組合結成後労働会議結成。改良主義的で広範な労働者組織化に至らず。34年我らビルマ人協会が労働者の中に入り35年同地で協会第一回大会開催。協会は労対部結成後別個に油田労働者組織部を作り連携して活動(B－25 p. 115－116)。
11) E－3 p. 175
12) J－4 p. 97
13) J－4 p. 98
14) J－5上 p. 69
15) E－5 p. 37
16) B－16 p. 116
17) 追悼B－13 p. 271ゼーヤマウンに語った言葉として述べられる。
18) B－18 p. 18－b
19) B－27 p. 239
20) B－27 p. 240
21) B－27 p. 241
22) B－27 p. 241

23) 挽歌、悲哀歌、悲嘆歌(ンゴーヂン)。伝統劇の愁嘆場で歌われるものの他詩歌として独立したものもある。
24) 『サヤー・ルン伝』の序「昔の反骨作家たち」。B－24p.1－21に収録。J－8も参照。
25) E－5p.37
26) J－7, J－9, J－14参照。

第三章

1) 「民族の日に何をするか」ディードウ紙38年11月5日号などの他に新聞雑誌に執筆したというが目録B－14に掲載なし。なお当時の新聞雑誌社はテインペーのような作家にはそのつど原稿料を払わず相当の生活費を前渡ししていた(ウー・オウンミン99年8月5日)。
2) フラペー、フラシュエー、トゥンシェイン、アウンサンら随時訪問(B－25p.319)。部屋に10日居候したタキン・フラペー(ボウガレー)は上記の外ヌ、ニョウミャ、タントゥン、アウンヂョーらと会う。テインペーは文は鉄、人はロウソク。個人的には慇懃で宿泊客のめんどうみもよく不快な思いは全くなしと回想(B－13p.87)。
3) インセイン刑務所のタキン・ルィンに食物たばこなど差し入れ(B－13p.130)。12月13日学生集会に弁護士ウー・チョーミン、ヌ、フラペーらと来賓で出席。国民の自由の制限状況について演説(J－5上p.188)。12月15日拡大執行委員会ビルマ政庁包囲作戦決定会議にフラペーと同席(B－25p.366－367, J－5上p.203では16日)。学外者の出席は珍しくなかった(ウー・オウンミン。99年8月5日)。当時学生だったダゴン・ターヤーもそれをインナー・サークルと称して肯定(99年8月10日インタビュー)。用途を明かさず寄付してくれる人物から包囲闘争カンパをテインペーが集める場面(J－5上p.210)は有産者にもパイプがあったことを示す。
4) J－5上p.270はバー通り267番地の自宅を出て逮捕。B－25p.319はスコット市場の部屋を降りて私服刑事に逮捕とされるが第三章注2)で12月20日死亡のアウンヂョーと生前対面したフラペー(ボウガレー)がバー通りに宿泊しているので前者が妥当と思われる。獄中テインペーは密かにマルクス主義の書籍持ち込みフラシュエー、アウンサン、タントゥンと学習(J－5上p.314－315)。ラングーン緊急治安法は200チャット保釈金で出獄可能。テインペーはオンキン、トゥンセインが身元引き受け。1月30日学生会議に獄中メッセージ送り(J－5上p.309) 2月2日H. G. ウエルズ歓迎パーティー(J－5上p.318－326)に出席しているので釈放は1月31日か2月1日。
5) 同書72章のうち学生闘争は18章から35章(J－5上p.155－中p.47)。解除の経過は36章から38章(中p.47－107)で全体の4分の1以上を占める。
6) J－5上p.309－311
7) J－5中p.1－18
8) 学外出席者テインペー、ヌ、アウンサン、チョーニェイン、チッ(J－5中p.62－65)。
9) トウーテッイエー紙セエタン紙が解除反対派支持。自治会連合を牛耳る大学生は本来立身出世をめざし地位や利益になびく。スト解除は地位や留学が目当て。フラシュエーは留学生に選抜されウー・プの婿となりテインペーはウー・トゥインを首相に推し自分は次官になるとの流言出る。学生連合内少数派の解除反対学生を協会指導部レーマウン、

タントゥン、サントゥンフラが後押し（Ｊ－５中ｐ．67－71）。38年発行のトウーテッイエーは事実上協会機関紙だった（当時同紙編集者ウー・オウンミン99年８月５日）。

10) 除名通知は理由不明記のままタキン・タントゥンが手渡し（Ｂ－25ｐ．307）テインペーは除名に抗議してタキン・コウドーフマインあて書簡送付（Ｂ－25ｐ．308－309）。除名時期は明示されない。

11) Ｊ－５ｐ．281－282

12) Ｊ－５中ｐ．24－25

13) Ｂ－25ｐ．279

14) Ｂ－25ｐ．305－308

15) Ｊ－５上ｐ．284—285。なお同書ｐ．311－312でテインペーが英国商品ボイコットや入閣拒否を戦術的効果なしと見る根拠にインド国民会議が州議席多数派獲得後州政府を組閣すれば労働者農民の当面の生活向上、減税、小作料軽減を実現し労働者農民組織化、反地主反資本家闘争が容易になるというインド共産党の路線を紹介。

16) Ｂ－21ｐ．109。ただしＥ－６ｐ．６では政府大臣との関係を告発され除名とされる。

17) Ｂ－25ｐ．306

18) Ｂ－11Vol.2ｐ．408－413

19) ティーボーで封建支配観察。藩主の首相と会見。ナマトゥーのボーキサイト鉱山で英国帝国主義の搾取状況観察。1300年事件で目覚めた労働者と接触。ラーショウの鉄道起点で中日戦争勝利のため戦う人々を観察。テインニーで藩主母君の盛大な葬儀と36匹賭博見学。シャン州の美しさと住民に共感持つ（Ｂ－25ｐ．311－314）。この経験はＪ－５中ｐ．254－318で使用。同書ｐ．93で39年３月主人公がテインペーのシャン旅行の噂を聞く場面があるのでスト解除直後除名、その後旅行に出たと思われる。

20) Ｂ－25ｐ．433で戯曲とのかかわりで少々言及。第三章注44）本文ｐ．35も参照。

21) 39年４月我ら協会モーラミャイン大会で共産主義色増し大会後共産党設立目的にインド共産党と接触。テインペーの招きとコミンテルンの指示でＩＣＰは Ｐｕｒａｎａｎｄｏｒ Ｎｉｒａｎｄａ Ｄｕｔｔを首都インド系ビルマ系両マルクス主義者集団に派遣（Ｅ－６ｐ．４－６）。1300年事件中ＣＰＩのＪ．Ｇｏｓｈラングーン着。ゴシャール、ムカルジー（Ｓ．Ｋ．Ｍｕｒｋｅｒｊｅｅ）をオルグ。ゴシャール過激な共産主義者となりデー、ナース、ボースら加わりベンガル州秘密テロル結社と連絡取る（Ｂ－29ｐ．８－９）。39年１月末ムザッファル・アフマドのオルグの一人プルナンドゥダス・グプタがシンガポールのインドシナ半島共産党本部経由で来緬。コミンテルンの区分でビルマはインドシナ半島に属したので調整後行動（Ｂ－19Ｖｏｌ．１ｐ．340—341）。類似の名前がプローモード・ダス・グプタＰｒｏｍｏｄｅ Ｄａｓ Ｇｕｐｔａ（1910－82）。38年５月１日ＣＰＩ入党。40年ベンガル州委員会書記。1941－42獄中。64分裂後ＣＰＩ（Ｍ）所属。ビルマ共産党指導者ゴシャールからゲリラ訓練を受けた（Ｄｉｃｔｉｏｎａｒｙ ｏｆ Ｎａｔｉｏｎａｌ Ｂｉｏｇｒａｐｈｙ（Ｓｕｐｐｌｉｍｅｎｔ）Ｃａｌｃｕｔｔａ）。設立場所メンバーも諸説。８月15日48番通り某一軒家。または49番通り100番地（Ｂ－29ｐ．10）。ミェニーゴンのミエヌ通り11番地バヘイン宅（ウー・オウンミン99年８月５日）。

メンバーはアウンサン(書記長)ソウ(大衆闘争担当)ゴシャール(秘密組織)バヘイン(学生担当)フラペー(財政)ナース(学習文献)(E－6 p. 6)。B－29 p. 11紹介の異説は8月13日イエチョーの我ら協会で設立。アウンサン(書記長)フラペー(財政)バヘイン、テインペー、ミスター・ドゥット(ダッタ)(フラペーに同行したベンガル共産党員)。翌日テインペーは愛国党党首ウー・ソーとの接触によりタキン・タントゥンの署名で協会除名。ドゥットもカルカッタに帰国。ゴシャールとソウを補充し15日結成。B－19Vol. 1 p. 342－343はテインペー、チョーセイン企画に参加したが結成時不参加。テインペー学生問題で協会除名、チョーセインは英国労働党と接触しひそかに文書配布し疑われたたため。タントゥンは招かれたが既にソウやアウンサンがいるので我ら協会活動に専念したいと断る。E－6 p. 6はテインペーが我ら協会から脱落したため結成時不在と述べる。なおインド側の資料サロージ／ムコパダエ『インド共産党と我々』第一部(1930－1941)236－237Saroj Mukhopadhaya"Bhavatav Communist Party o Amava"Kolkata, 1985は1939年ゴシャールらがダッカを訪れDV. ラネンセンを介してP. C. ジョシー、ムザッファル・アフマドらと面会。ビルマ共産党設立協力要請後帰国。1940年3月の会議派ラムガール大会出席の名目で訪れたアウンサン、タントゥン、バヘインらが共産党設立をインド共産党指導者と立案し40年5月にビルマ共産党が設立されたとする。

22) E－7 p. 3－4。B－25 p. 278はバモー政府が倒れた2月を闘争最高潮とするのでオルグ到着は2月と考えられる。

23) J－5上 p. 323

24) J－5中 p. 170－185に詳述。

25) B－19Vol. 1 p. 344は結成後ラングーン東部某所で開催の秘密講座に言及。アウンサン、ソウ、ゴシャール主催。フラミャイン(ボウ・ヤンアウン)、ティントゥン(ピンマナー)、マウン・トゥイン(チャイマヨー)ら受講。党活動は学習会のみで闘争の直接指導なし。E－2 p. 7も39年から41年独自活動なく我ら協会や10月結成のフリーダム・ブロックで活動したと述べる。

26) J－5下 p. 101－107。講師はソウ、フラペー、ボウ、チョーセイン。テキストは「共産党宣言」「何をなすべきか」「帝国主義論」「戦争と第二インターナショナル」「賃労働と資本」受講生20名。時期はタキン・ソウらが大挙して逮捕された40年6月－8月の直前とされる。

27) 39年7月ミャンマー・アリン誌掲載。インドパンジャブ州で英国人建設の農村改革モデル村に感銘したビルマ知識人が健康と清潔をスローガンに国内でも実践。農村改革の突破口として反社会主義宣伝に利用されたことから農村の資本主義的搾取打破が真の農村改革と説く(B－25 p. 279－281)。

28) 武装革命の機熟さずマルクス、レーニン、スターリンに学び力を蓄え世界大戦不可避ゆえ英国の窮地に乗じよと説く。闘争激化時出版。人気あり版重ねるが政府が発禁に(B－25 p. 285－291)。B－15 p. 86はナガーニー出版物58番目1940年の出版とする。20頁小冊子。会員無料非会員20ピャー。

29) 当時支配的な黄色人種白色人種対立大戦観や恐怖を煽る戦争終末観などへの反論として特にジャーネージョー・ウー・チッマウンを念頭に書く。当面の敵は英国だが日本も警戒すべき。人種的でなく階級的な見方が必要だと当時反ファシズム的だったネルーの思想にも依拠して執筆(B－25p.292－301)。94頁小冊子。ナガーニー出版物34番。発行元としてサンヂャウン・パドゥマ通り29番地の著者住所が掲載されるがナガーニー出版物リストに入れられている。巻末日付39年9月19日。39年10月2日4万8千部印刷。8ペエで販売。作者の著作広告「ビルマの国と帝国主義」(印刷中)「ドイツは馬鹿か」(執筆中)も掲載(B－15p.55－56)。前者は著作リストB－14にも自伝にも言及なし。後者はパドゥマ通りで同居中のトゥンシェイン(後のボウ・ヤンナイン)執筆。40年テインペーの名で出版した反ナチズムの書(B－25p.326－327)。さらにJ－5中p.218はナガーニー・ジャーナルでテインペーが独ソ不可侵条約支持したため政府が同誌発禁処分にしたと述べるが自伝は言及なし。

30) 39年2月のH.G.ウェルズ歓迎パーティーと40年初頭有名作家ピーモウニンの葬儀に作家多数が参集したのが契機(B－25p.332－341)。名誉総裁タキン・コウドーフマイン、ウー・ボウチャー、ウー・セイン、議長ウー・バチョウ、副議長ダゴン・ナッシン、マハースエー、書記長ティンカー、副書記長パンウッシュエー、会計ミョマ・サヤー・ヘイン他の委員ミョマ・マウン、グエーサンダー、ダゴン・ターヤー、ザーニースエー(B－7p.145)。ジャーナリストの組織が別に存在したのも消滅の一因(B－25p.341－342)。42年9月日本軍の宣撫策で再建。

31) オンキン夫妻と同居で暮らしやすいが一人暮らししたくなりすぐ近くのノーマン・スクール通りで部屋を借りる(B－25p.319－320)。同時期トウーテッイエーにも執筆したが出版者とそりが合わず(B－25p.324)。

32) ヌとコウ・オウンがニャーナを紹介。テインペーと似た者同士でへそまがり故すぐケンカ別れすると見られたがかえって親密に。ニャーナ宅に月極めで食費を払って食事。妻のドー・ミャのお茶受けが美味で他にトゥンペー、キンゾー、俳優コウ・エーらも来訪(B－25p.324－325)。後にシュエードン・ビーアウン、ダゴン・ウー・フラペー、トゥンセインらも加わる(B－13p.201)。ティンヂーは学生時代テインペーのパドゥマ通りの家を若手作家仲間マンテイン、マウンマウンキン、フラチーらと訪問。清潔で椅子2、3と机がありベッドは整い本は少なく整頓され政治活動家作家らしくないと感じる(B－13p.181－182)。

33) 仏典印刷所社主が広大な敷地と倉庫をニュンに売却するが倉庫内の仏典が処分できず明け渡しを求めるニュンと係争。テインペーがトゥンセイン、オンキンと作成した企画書をもとにニュンは仏典再製本。寺院奉納施主募り売却して巨額の富を獲得し社主に和解金を支払って解決。ニュンは前金として銀行に監督テインペー名義の口座を作り1,200チャットを入金。製作にあたり金に糸目はつけなかった(B－25p.346－349)。

34) イギリス、インドなどの小説を言葉のできる人間に読ませ粗筋を話してもらって脚色(B－25p.349)。当時作家マーガもヒンディー小説から映画に適当なものをテインペーに探してやったと回想(B－13p.282)。

35) 作品は"Ｇｌｏｒｙ　ｏｆ　Ｍａｎ"。題名が気に入りそのまま使用。有産階級の男が田舎娘に子供を産ませるが娘は子供を殺害し告訴される。男は反省し娘を援助し男の婚約者も苦しみながら男を支え男が威信を回復するという革命的でなく改革的物語（Ｂ－25ｐ.350―351)。原作者Ｓｉｒ　Ｈａｌｌ　Ｃａｎｅとされるが英国のキリスト教社会主義者でベストセラー作家Ｈａｌｌ　Ｃａｉｎｅ(1853－1931)と思われる。

36) 母の死亡は40年の10月11月頃(テインペーミン妻ドー・キンチーチーへの1999年８月３日のインタビュー)。当時父母はモンユワを離れチンドゥイン川の対岸父の任地のサーリンヂー在住。葬儀後サーリンヂーで彼は民衆生活を観察。父子には確執があり母の死後数カ月で父はテインペーより若い娘と再婚。テインペーは戦後長らく故郷を訪れず（Ｂ－25ｐ.370－374)。

37) 自伝に完成時期明示ないが40年10月12日のインタビュー記事に完成間近とあり。そこでテインペーは男性向け道徳映画だと映画の教育的価値を強調（Ｂ－10)。自信満々で本来適役のベテラン俳優起用せず１ランク劣る俳優を成長させようと起用して失敗。弁護士役俳優もまずくテインペー自ら出演。エーワン映画社のコウ・ティンマウンからアイディアはいいが具体化する技術がないとの批判も（Ｂ－25ｐ.352－354)。

38) Ｂ－25ｐ.354－355。会社企画はトゥンセインと（Ｂ－25ｐ.376)。

39) プローム通りでフラシュエー夫妻の出奔匿う（Ｂ－25ｐ.327－328)。チャウミャウンで潜伏中のアウンサン(40年８月に国外脱出)預かり出入りの監督の一部は気づいたが口外せず（Ｂ－25ｐ.358－359)。６月から８月に300名余り逮捕。獄中ヌが映画を見たいと要求。ウー・ソー首相と交渉。バドミントンや書籍もさし入れ。タントゥンはビルマ・ソビエト友好協会結成や訪印しビルマ革命の援助を乞えと書簡で要請（Ｂ－21ｐ.101)。Ｂ－25ｐ.359はホステルに転居と述べるがターヤー（Ｂ－８ｐ.123)ティンミャ（Ｂ－19Ｖｏｌ.２ｐ.97)はＹＭＣＡに居住と述べ記憶違いしている。なおティンミャ出獄直後41年６月タキン・バヘインと共にテインペーを訪れ２人の会話からテインペーが映画監督を装いながら革命事業に関係していると悟る。ブリティッシュ社退職時は明示されないがこの時点では彼はまだ映画界にいたことになる。ティンミャは獄中タキン・ソウから共産党の活動をするよう命じられたが共産党は壊滅状態でかろうじて革命ユニット(のちの人民革命党)の活動をしていたバヘインに協力。

40) Ｂ－25ｐ.377－378。タントゥンがアウンサンと40年３月ラムガールの国民会議大会に出席しインド共産党とも会見したことと関係か。タントゥンは６－８月の大量逮捕に含まれているので処分撤回は３月から逮捕までの間と推測される。

41) 入院時期明示なし。自伝はタントゥンとの会見直後入院したとにおわすが最初は通院治療。治癒と再発が繰り返し深刻な事態を懸念して入院（Ｂ－25ｐ.378－379)。入院時期はキンチーチーへのインタビューによる推測(99年11月４日)だが40年末までは『男の栄光』撮影、母親の葬儀などで多忙と思われ12月25－26日のラングンーン大学での全ビルマ学生連合大会（Ｂ－２参照)アウンヂョー銅像除幕式でテインペー挨拶が学生に受けたという回想と、41年夏季（３－５月)にバモー、カターに旅行途上のテインペーに出会ったという回想をシュエーグー・ソウミンキンが述べるので（Ｂ－13ｐ.76－78)入院が41年

1月2月という推測は成り立つ。

42) 出版年は1938年とB－14にあり第3版(1947年)にも第一第二版が1938年出版とされるが38年ではあり得ない。キンチーチーは41年10月にラジオで書評を聞き(99年11月4日)B－8 p.163も41年出版と明示。後述41年10月の書評B－4も1カ月前に出版したと述べる。

43) B－25 p.431－432

44) B－25 p.432－434

45) B－25 p.434－435

46) ウー・ソー、ウー・ティントゥッ、ルーズベルト、チャーチル、エマリー、ミッキー・ルーニー、ジュディー・ガーランド、留学生ウー・オウン、ウー・ティンテイン(ニョウミャ)が実在人物名で特派員ドロシー・ジャドソンが架空人物(B－25 p.436)。B－25 p.437－451まで作品について解説。作品後半部は空襲で焼失し未発見だがB－5 p.555－595にウー・ソーのロンドン出発まで掲載。

47) B－25 p.451

第四章

1) B－25p.318－382。タキン・バタウン翻訳のイプセンの性病をテーマとした戯曲「幽霊」が「父の遺産」の題名で当時すでに上演されていたが、それとの関係は言及なし。

2) B－25p.327－331

3) B－25p.319－320

4) B－25p.378－381

5) B－23 p.36

6) B－25p.404

7) B－27 p.264。娘の父母は人徳名声があるが金持ちでなく、娘は第2次大戦中死亡と自伝で語られるが、彼女はディードウ・ウー・バチョウの娘の一人とされる(J－5下巻p.393)。なお監督時代彼は富豪スタイルの装いで友人を驚かせたとの証言もあり(B－9 p.123)富豪の娘との結婚話もあったという(B－13 p.181－182)。

8) B－26 p.2－3

9) B－26 p.4－5。キンマウンはトーダー(田舎者)という筆名で執筆。彼との交流についてはB－21 p.104－105にも詳述。

10) B－4 p.344－346

11) B－17 p.19、B－28 p.151－152など。ゼーヤマウンも彼の『進歩僧』と『現代の悪霊』が最上と述べる(B－13 p.261)。

12) B－13 p.277－278

13) B－8 p.3－6

14) B－24 p.29。人民文学については同p.36－p.87参照。

15) 時間の流れはあいまいにされる。主人公は失恋後6カ月の放蕩で発病入院し退院後6カ月で結婚する。この結婚は失恋から1年後と述べられるが(B－26 p.174)ここには入院期間が含まれない。また登場人物の年齢も明示なし。

16) モデルは作者が1935年陰嚢炎で入院した時出会い好意を持った年若い看護婦をベースに41年入院時出会った看護婦のうち好感の持てる人々の姿を混ぜ合わせた(B－25p. 404－407)。なおアピューは白色という意味。
17) B－26p. 156－166
18) ウー・オウンミンの1999年12月4日のインタビューではキリスト系団体の売春婦更生運動はあったという。また39年当時ゴシャールら活動するインド系マルクス主義組織が入居する建物の階下が売春斡旋所でインド人ビルマ人業者が出入り。客を取るのは中国系のホテルが使われたという。またJ－3p. 219は当時あらゆる民族宗教の婦人からなるラングーン矯風会が婦人の保護と魔窟業の摘発を目標としていたと述べる。
19) B－26p. 185－188
20) B－1p. 81－82
21) B－3p. 669－670
22) 96年版が6版とされているが実は7版。41年に2版を重ね47年50年代(出版年明記なし)68年72年と出版されている。
23) B－12p. 136－144。作者はトゥッカウン。
24) B－12p. 139
25) たとえば売春女性を意味するビルマ語Meinmabyet(身を持ち崩した女)Makaundhaw Meinma(よくない女)に対して買春男性は身を持ち崩した男とかよくない男とは称されない。植民地ビルマの売春についての叙述はJ－3p. 219では皆無に近く他の諸国ほど梅毒も深刻ではないと述べられる。英国側からの記録J－16における断片的な記述も他の諸国に関するほど豊富ではない。またビルマ側の資料も王朝時代の遊郭の記録B－6があるのみ。

## 文献

E－1Aung San Suu Kyi'Socio－Political Curr－ents on Burmese Literature 1910－1940' "BURMA AND JAPAN"The Burma Research G－roup, 1987, Tokyo
E－2Lintner, Bertil "The Rise and Fall of Communist Party of Burma"New York, 1990
E－3Min Latt'A Dawn that Went Astray' "Mainstreams in Burmese Literature"New Orient(bimonthly)II－6, p. 172－176, Praha, 1961
E－4Minamida, Midori'On Anti－fascist Writi－ngs of Thein Pe Myint'"BURMA AND JAPAN "1987, Tokyo
E－5Milne, Patrica "Selected Short Storie

－s of Thein Pe Myint"1973,New York
E－6Taylor,Robert H."Marxism and Resistan－ce in Burma 1942－1945 Thein Pe Myint's Wartime Traveller"1984,Ohio
E－7Thein Pe Myint,"Critique of Communist Movement in Burma"Rangoon,mimeo,nd.
J－1アウンサンスーチー著ヤンソン由美子訳『自由』集英社１９９１
J－2大阪外国語大学アジア研究会編『アジア現代史年表』１９８９
J－3ジョン・ルロイ・クリスチャン著日本外政協会太平洋問題調査部訳『現代ビルマの全貌』同盟通信社１９４３
J－4テインペーミン南田みどり訳「石油」蔵原惟人監修『世界名作短編選東南アジア編』新日本出版社　１９８１
J－5テインペーミン南田みどり訳『東より日出ずるが如く』井村文化事業社 上中１９８８、下１９８９
J－6南田みどり「テインペーミン短編小説の世界」大阪外国語大学大学院修士会『外国語・外国文学研究１』１９７７
J－7南田みどり「小世界の「自由」－テイン・ペー・ミン最後の小説の意味－」『外国語・外国文学研究２』１９７８
J－8南田みどり「テインペーミンにみる伝記文学－タキン・コドーフマインとのかかわりをめぐって－」『外国語・外国文学研究３』１９７９
J－9南田みどり「テインペーミンとキッサン文学」『大阪外国語大学学報第５２号』１９８０
J－10南田みどり訳・解説「戯曲テインペーミン『新しい時代が明ける』をめぐって」大阪外国語大学アジア研究会『現代アジア社会の研究』１９８２
J－11南田みどり「二つの大戦前夜－「東より陽出づるが如く」への「パリ陥落」の影響について－」大阪外国語大学アジア研究会『第二次世界大戦とアジア社会の変容』１９８６
J－12南田みどり訳・解説「テインペーミンン著『ビルマで何が起こったか』をめぐって」大阪外国語大学アジア研究会『大阪外国語大学アジア学論叢』創刊号１９９１
J－13南田みどり「『東より日出ずるが如く』にみる１９５０年代の影」『大阪外国語大学アジア学論叢』2、１９９２
J－14南田みどり「事実と虚構のはざまで－テインペーミン６０年代の二長編－」『大阪外国語大学　アジア学論叢』3、１９９３
J－15南田みどり「事実が虚構をしのぐ時代の文学－テインペーミンの抗日時代－」『大阪外国語大学　アジア学論叢』4、１９９４
J－16ロナルド・ハイアム著本田穀彦訳『セクシュアリティの帝国　近代イギリスの性と社会』柏書房１９９８
B－1Atauktaw Hla Aung 'Yinnyein Sa'"Phyun－ipya Magazine"Nov.1969,Yangon
B－2Aung Htun"Kyaungdha Hloukshahmu Thama

-ing"Yangon,mimeo,nd.
B-3Aung Thin'Saphatthu Khanzayadhaw Sapa
-y Oza'"SaoukSapay"Vol.2,1973,Yangon
B-4Chindhe'Webanza Tet Khit Nathsoe'"Gan
-dalawka"Vol.XXII,No.20,Oct.1941,Yangon
B-5Chitkyiye Kyinyunt"Thamaingwin Thuriy
-a Myanmar Alin hnit Myanmar Naingngan
-ye"1970,Yangon
B-6Chit Sein Lwin"Hsaungkyamyaing Mattan
"1967,Yangon
B-7Dagon Shwe Hmya"Myanmar Naingngan Sap
-ayhsumya"1972,Yangon
B-8Dagon Taya'Sitpyihkit Bama Wuthtumya'
"Thwaythauk"Apr.1952,Yangon
B-9Dagon Taya"Youkpounghlwa"1955,Yangon
B-10Dhadindauk Tau'Hnathaungledaung Tabo
-phyatthaw Bama Zatnyunt'"Sanay Nagani
"12,Oct.1940,Yangon
B-11Do Bama Asiayoun Thamaing Pyuzueye A
-phwe"Do Bama Asiayoung Thamaing"Vol.1,
2,1976,Yangon
B-12Htut Hkaung'U Thein Pe Myint (dho)Te
-t Hkit Thamma Dewanatko Mwehpwadhu'"Z
-iwaka"Oct.1999
B-13Man Nyunt Maung"Thein Pe Myint Youk-
-pounghlwa"1980,Yangon
B-14Maung Aung Myo Min"U Thein Pe Myint
Sazusayin"1975,Yangon
B-15Maung Kyaw Hoe"Nagani Saoukathinhdou
-k Sazusayin"1975,Yangon
B-16Maung Sun Yii"Bamaza Bale Bele"1976,
Yangon
B-17Min Kyaw'Myanmar Wuthtushe'"Saouk Sa
-pay"1973,Yangon
B-18Min Yu Way'Pyidhu Sayehsaya Thein Pe
Myint'"Myawaddy"Feb.1978
B-19Thakin Tin Mya"Bonbawahmaphint"Vol.1,
1966,3rd.ed,Vol.2,1965,Yangon

B－20Thein Pe Myint"Kala Bama Taikpwe"1938, Yangon
B－21Thein Pe Myint 'U Saw Bilatthwa Pyaz－at hnit U Hkin Maung'"Sabaungzu Sapay Webanye"1971,Yangon
B－22Thein Pe Myint"Bonbawahnit Do Bama", 1954,Yangon
B－23Thein Pe Myint"Kyanaw Wuthtudehma Ky－anaw Zathsaungmya"1969.Yangon
B－24Thein Pe Myint"Sabaungzu Sapay Webanye" 1971,Yangon
B－25 Thein Pe Myint"Sapay Bawa Zatlan－－zoung 3"1981,Yangon
B－26Thein Pe Myint"Tet Hkit Nathsoe"1996, 7th ed.Yangon
B－27Thein Pe Myint"Wuthtudo Baunggyouk" 1998,Yangon
B－28U Houng Wun&U Khin Aye'Myanmar Wutht－ushe'"Myanmarhmu"1975,Yangon
B－29Yebaw Thit Maung"Pyidwin Thaunggyanh－mu"Vol.1,1990,Yangon
B－30Yebaw Hla Myo "Thein Pe Myint dhomah－ou Apegan Naingyedhama"1961,Yangon

なおインド共産党に関してご教示くださった桑島昭先生に心から感謝を捧げるものである。

# Thein Pe Myint 1938-41
# -Between Shadow and Light-

Midori I. MINAMIDA

Thein Pe Myint has made reproduction the period 1938-1942 in his works ,such as novels, dramas, articles and remininiscences. He seems to have been very eager to write about the period. In spite of that, there are some important matters that he conscerned himself left off.

I have already inquired the influence of his anti-fascist actions - Dec. 1942 to Mar. 1945 on is literature .In this paper I tried to make clarify his thought and action in 1938-1941 from his works and other materials as much as possible. Then I tried to inquire the influence of his political and social action on his novels, such as the reason why he wrote three short stories and one long novel, the historical significance of his novels and so on .

The contents are as follows.

Chapter1 The background of the short stories -Apr. 1938～ Sep. 1938-

1 The background of his return to Burma

2 "The Indian-Burmese Riots"

Chapter2 The Colonial Burma through short stories

1 'Mali -the gardener-'

2 'Oil'

3 'The Songs to Make One Weep'

Chapter3 The background of the long novel -Oct. 1938～ Oct. 1941

1 The background of his expulsion from Thahkin Party

2 The influcence of the expulsion on his political actions

3 In the cinema world

4 The return to the literature

Chapter4 The long novel "Evil Spirits of Modern Times"

1 On the motive and the critiques

2 The breakdown of the reformism action